

ま え が き

学校長 太 田 雅 夫

本校は本年度創立45周年を迎えたが、附属学校の使命としての研究開発は益々重要な位置を占めるようになった。平成6年度から実施の高等学校の新教育課程や入学者選抜方法等々研究課題は多い。本校は平成4年度、文部省の教育研究開発校に指定され、「新教科：国際・文化科の導入を考慮した教育課程の検討」を開始し、この教育の一環として北京への現地学習が実施される。思えば戦後教育は経験主義教育に基づく単元学習の導入、問題解決過程重視の理論及び実践が主流であった。しかし学力低下の指摘や単元学習への批判が強くなり、体系的な知識理解の習得を重視し、教材を論理的な順序で提示する系統学習への動きとなった。学習指導要領の改訂でも単元学習から系統学習への転換がみられ、受験競争過熱の状況も加わって、系統学習が主流を成すようになった。かかる状況の中で、この研究開発は細分化された知識中心の学習の行き過ぎを是正するための総合的教科を指向するものとして意義は大きい。そして、討論を通しての集団的問題解決と集団思考を重視する学習や自由研究は一つの方向を示していると思われる。本校が取り組んできた研究開発の概要を滝野教官は、冒頭で紹介している。

山本教官は、本校で20年間実施してきた特別合同授業の開始時に検討された趣旨、目的、方法を改めて紹介し、この理念と目的は今なお変わらず、この授業の必要性は一層増大していると考え。続いて合同授業のその後の展開について、講師、方法、費用を概観し、その特徴と若干の問題点を指摘している。また、3年生と卒業生に対して行ったアンケート調査を実施した結果の合同授業に対する意識を纏めて、評価と反省点を明かにした。今後の合同授業の充実・発展にとって重要な研究報告である。

木村教官は、歴史教育の転換期によせてと題する研究報告の中で、現代という時代性の中での後期中等教育における歴史教育の基盤を考察している。戦後、後期中等教育の歴史教育は幾多の変遷がみられ、平成6年度から地理歴史科が新設される。この機会に歴史教育を再考察する必要性から、歴史の意義、時間・歴史観、歴史（世界史）の問題（提言）を豊富な資料を参照しつつ論述している。新設される地理歴史科の基本的概念の検討に際して、大変示唆に富む研究報告である。

上田教官は、長年に亘る高校数学科の教育実習の経験から作成した教師用の覚書に、公立学校の教師との授業研究の際に作成したものを修正追加して、この研究報告を完成した。数学科の教育実習に対する姿勢、実習の目的、実習生指導の枠組み、基本的な授業技術、発問構造の構成、生徒理解ならびに評価、教師が作る生徒の授業態度・学習態度、教師批判ならびに今後の学習姿勢、整理会のための教師用資料等について詳述している。数学科はもちろん、その他の教科の教育実習にとっても大いに参考となる研究報告である。

田井教官は、パソコン通信の伝達の瞬時性、相互伝達性、広範な通信網等の特徴をコミュニケーション活動に有効に用いることができるか、英語の学習にどのくらい効果があるか等を検証している。パソコン通信のしくみ、本校でのこれまでの主な取り組み、取り組みの形態と内容について交信例を紹介するとともに、パソコン通信に関わった2年生全員を対象に実施した

アンケート調査の結果及びパソコン通信の問題点、留意点を挙げている。英語及び英語以外の教科へのパソコン通信の活用にとって重要な研究報告である。

風間教官は、歴史物語の大鏡では、歴史が紀伝体で記され、高等学校で扱う平安朝の文学作品群の殆どが含まれていること、この作者が、それらの作品や作者、その作品の登場人物についても積極的に言及していることに着目した。そして作品や作者を取り巻く時代・社会を感じることでできる古文教材としての可能性をもつと考え、2年生で授業を実施した。この研究報告では、その授業の内容を紹介し、古文に対する関心の持続等で効果的であったという。古文の教材研究、実践研究にとって、発展の期待される研究報告である。

読者の皆さんの忌憚のないご意見・ご指導を賜われれば幸いである。